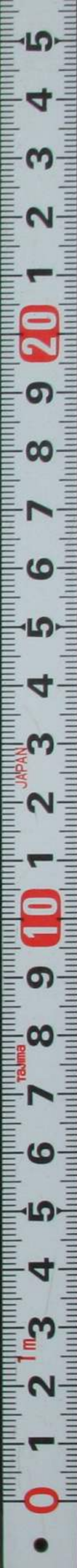
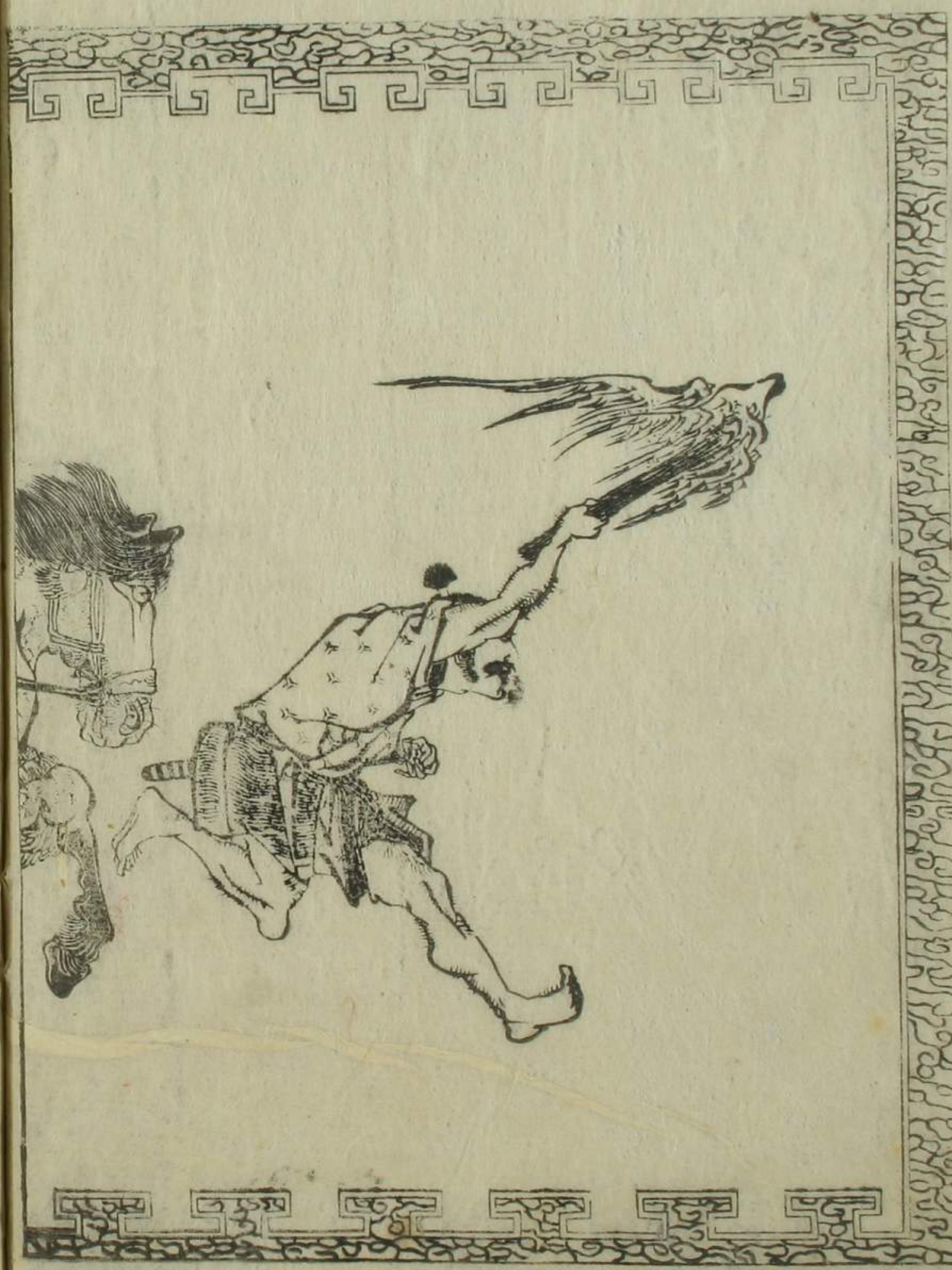


繪本月宵鄙物語

三

3154
3





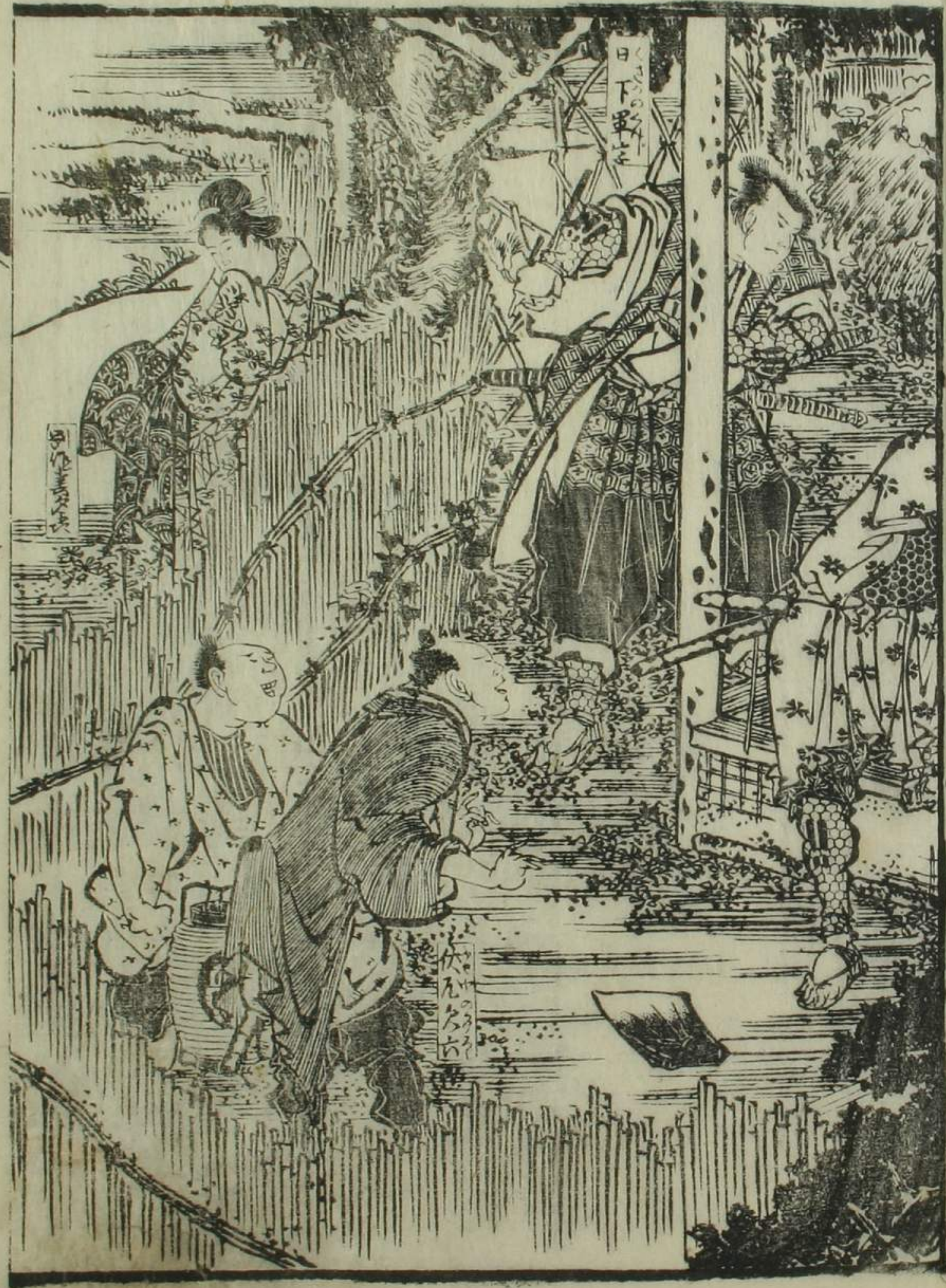
くと疎く仕を久しは農人と成てあり世に頻りお道公火起しくいそ
 善光寺の山仏に常燈寄進せりやと常に口癖のやういふれり
 か三歳の時に太刀刀あひして百支節の令とほし程不足されは諸國を
 進して我れ果するに二年の間あひなり身んとて及務の布帷子にて皮
 籠負て出給ひ後我れ今も目前に在るに五十年の今日が日まき其亦
 お在との音信ぶふられはを中う亡人とあり程いつとんと悲し中おも牧多の
 今も眼くれしは愚者どもや失ひえんと疑いあ耐さへありて浅猿たれは他人
 の物へ紙一枚葉物ひとり目をかゝると孫もたまりぬ教へつれば渠あくる
 してさる鄙俗らあ露りて推父の子お他まするたをさへ讀むらひてさ
 門をさて薪を割く居る父隣の前が就と推芥を取のりて邦吉の此比
 おといわ抄漢とほしはほことおよむあや然へまこと續出くらば返一さら

せんと思ひなりれば

ぬきまごまのたつりるま世の中およそ成りてくれいふせん
 とよこのり孫のまごが武士の孫のたれおこゝろなと父の志あり似る此
 令ぞ持めてめらう返せりと涙を握ひついで剛健ハあはさうの向を
 泣居りし程面をもよと鼻をさすりあや父翁の在程お母人の老語あて
 せむはければいふに方あんと十六のじは暇後やて或附ハ一年或時ハ
 二と十五年か間み我七道珍りや尋ねられと夫といふ使りもは後
 妻の所縁あうりて此里お後で住しも彼山寺の順路たれは希下向の暗
 をさふせんとさうかた頼むるに愛お初てよりま善光寺詣とえれば
 同おさう尋ねればとさる人ありといふ者もなれば今一度國を離れ尋
 せんと思へど母人のじ月添くをれ後るお傳とあはれにへき妻

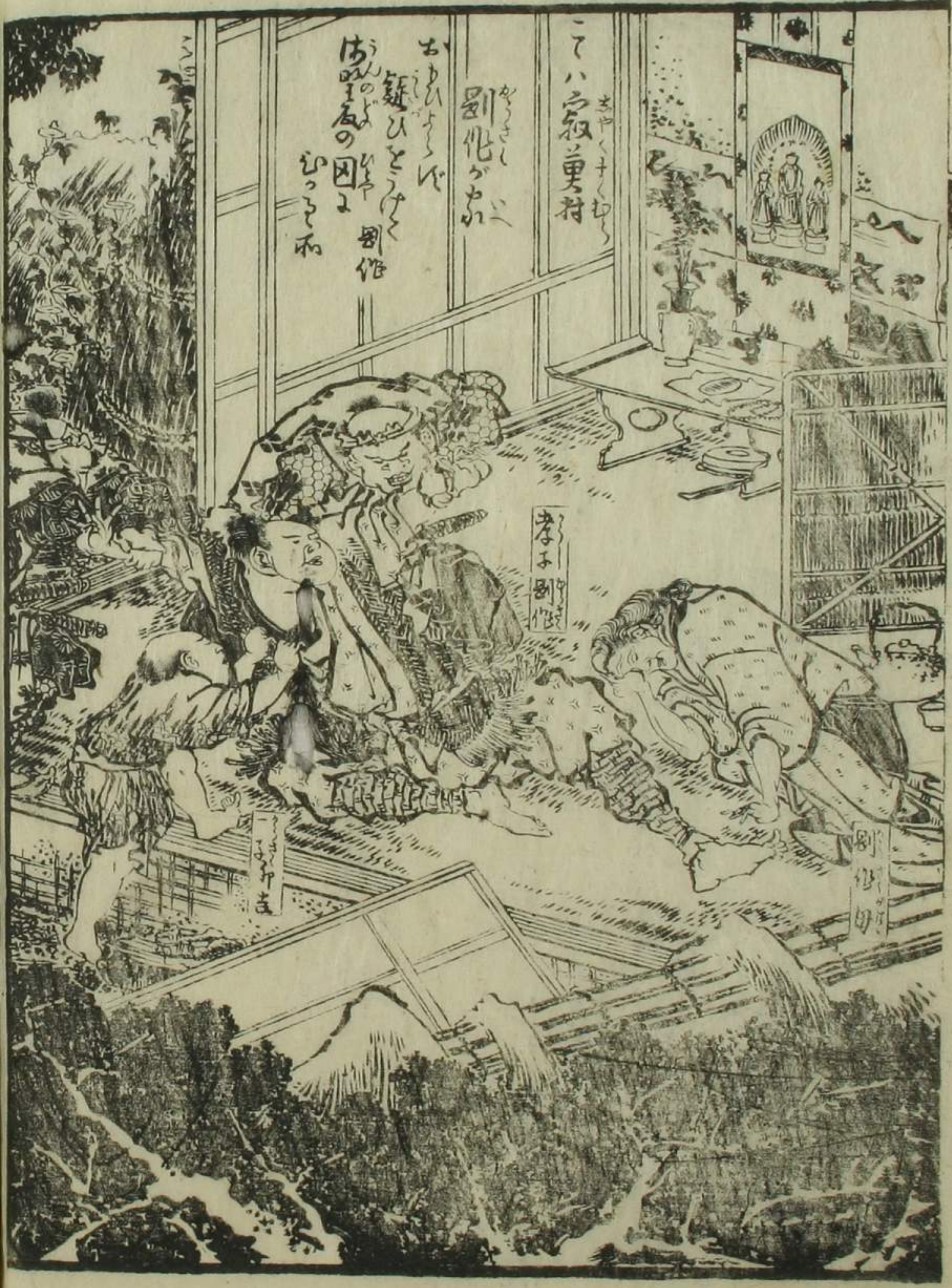
て後下入は別れの初餉の米か汁やとるに後後使番をきて臥の
 臥る傍にせせ金熟睡するや否やをうかぶ登責をれ一宵寝るを
 むれは如きは脱けられ霜が浴衣をうけて足袋久保へては入河とて
 ぬせ霜の今より度ぬくと同の先やゆりて子眠りぬ我も添付のねとて枕を
 てあじ森入るるまはしてこころ起り紙帳のりとははしよりて母の枕をのりて
 たりさるは夜半の鐘も鳴れぬ蚊も火もさへて少ら目睡が朝の
 啼一声小夜や明ぬるんと蚊とさへ静支度と草鞋とて芥子投門乃
 戸の音も目もして後更なるやと鳴るや此比の姥捨山の狼小病
 付て人害ふと生るる瓜もど夜流るるし今も明果と土とへひひしは部
 の探子もいかにさるるを常の母の河原のりては
 るまのや母のるる否るる山のはりもまぐ伏臥へも行くはるるの例のりて

早うあるもまれとみ曲河原の夜も明ぬへし母は寝のそとに後
 中味夾の空と見えきていかにいかに五自圍は少まひて漸く二
 丁ごうすもるるやあや何のあは物小舞ひつきてのけはは例をうけ打る
 きさるる芥を又投けてり。尻骨をのりて突ては反て目よりれば。あは口を
 手耳山谷を指越れ一度け箱もこもなれを年ハあるはどはあどはば
 きつ記よんるるに物よとるやあて二三度打りて漸く這起芥をよするとて
 ところ探り廻るるはねとにさる物小探り當ぬ人の杖とさへは月星の軌
 小すしえさよ持めて又小見やつはしく狼を喰れなる人母の詞今も思
 ひ出たこれとて驚きてまのく小早よかおの芥もなればはと取て我家に
 久の門引明くる喜のひのあはしに母も寝て紙帳より出んとすをさへ
 さる小驚きさるるもあはしなれり小早よかおの芥もなればはと取て我家に



日下軍

大九



おひさしや
 舞ひとつげく
 街のの団よ
 ひつとわ
 別化がわ
 こへハ之叙更村

おひさし

存る小判也。これの後せめて先出を以て軍字を打返して我も又ある
 事打ち伏玉の令は終は斯揭馬を遣出する入の唯々や引去り下
 知を此村々霜の若太がめくも後こそ一を衛ゆる身はつと入る人も流るも
 ばかしくて脊戸の口ははし祝けが別儀の纏付て曉も外吉も注居る向ふ
 叱咤して抱ひをる人の此比若太がめを付て腹立ちらる軍字はれ
 何故とあふねと先ぞくして内へも入はる抱まされては居る。その
 別儀は昨日曲河の堤あて長者の往合桂枝を賣て合を待たり有
 の件を詳よ告ぐ泣流れどもえ来まとおつても先ひ度思ひ居るれ
 剛世のれがいうを赦さき愈怒りておあふれ大盗人の中。囚獄も打
 込て嚴と拷るを預られは流ぬ抱を抱ひよせと立よと再び知る
 に何うの控豫をきき今の正体は注例とする母の方と捻返り離がけ

する剛世を宙の立く表は出れば外吉の祖母の脊を掻きとりてとも泣
 居る。この件をえく不堪うも軍字が前不頭をきげ父の一日も居る
 己の祖母をさめ者もなし何とぞ父をゆして我を打も終りもして連れせ
 終られしとして手を抱て拜むを目も熱を出しけが尻尾もまき泣流る
 をはせしることいふ穢鬼ゆるると襟頭をて引戻。さうり終りくられ
 しく此欠六が顔めて親やとおはじがはしてくれんと行くをれと突倒して
 同く出ぬ斯る際も夕霜の長者の殺されははしを立す必定善太が
 亦あるうんと公付さうも渠も捕へられ我も夏愛目をやと忽頭上も雷
 の落かぬ公地。これにや此はを若太お告あらせ此雨を逃去て添
 遂んと思ひ定めてやて大活の方まきぐり既も南をはして走り行く。

仇野山の終薪

斯く夕霜の善太りりととまり向う足も息もたれどなき人あり。
 従者小弓も持せ自らうと誇のそらさくかけ。藪を打たがりて
 影のいろも美氣ふくたれはる周章中も若き男とにりへは
 見えまね徒女めて目をさめ行榜小弓も十七八の少年の面の交換て
 公さに艶する額髪をわれく涙を一目うけてゆく熱するはは沙虫
 うる中く小足愛も可愛くも足たり。足をさるる公惚くと成て若太
 が牙の上のりより我牙のるらんやうも打忘れ此人の行らん方邊
 く。跡目付て公もあは立降るへ且輕きも別化を引きませ。さも仕
 渉教を軍字が安とあは遠お付て此友人を教合せうぶ何と
 あも好平のあじと流石よこり付て彼若人を見送つ復道小阪去ぬ
 此少年ハナや伏屋の弓太郎なり。此日父の長者が座りの送りたれ。

欠六とりのあま分て遠いお出が千曲河の堤まが正しくおしりいと云
 者のあまはゆせかの河辺を上り下り尋て此村あからがりたれ。此
 変るを知れ欠六のこれを生抜く己一人生身教て後日には世と
 撞へて態と生身が秘が知るべき中もなきて夜明るまで尋芳とく公
 ろくは立降る踏ま里人集り居て然斗悲涼り。長者屋のゆる災難
 達る事柄の抑前世の宿業。此の思刀目や悟合員の報ひるんとは
 は小のひあまが不斗に耳まかして胸の躍たれ。やとて立圍る人か
 きて立寄小既目代屋のんが残りたりとて守人梅を突つて邊へよ
 せど名告して近付て見れば。る目もうて荒蕪を打斃て骸血泣
 押ひじられ父をいうて遠人目も暗公も涙とて其怪小とり送り
 涙も行も事いつ人目も恥と泣居るが此人殺し今捕へられり。

乃物言卷之三

て里人の近きるを以て捕揚す。その敵何人の捕へるか。若くは孫とて
 餘ふせんといひはるまゝ走りしむる。欠六それとて入る。人も皆
 ばあは吐てはけり。あまう。多田うらの強ふ。今まで顔出もせ。何と夜這
 歩行する居られる。そ欠六あまう。師がが。おれ。敵のやうをその庭
 左右に捕へる。や。足を切。り。伏屋の所。半。分。取。も。異。論。の
 らじと誇む。て。猛。攻。を。弓。太。郎。の。耳。も。鈴。を。軍。字。小。代。て。退
 捕の労。大。謝。し。頓。て。敵。の。男。に。さ。う。ま。は。し。られ。も。既。に。國。司。の。囚。人。と
 成。され。根。も。下。し。難。く。て。拳。を。握。り。て。抑。へ。り。軍。字。剛。他。を。指。さ。し。く。
 此。剛。他。といふ。故。奴。さ。う。も。ち。和。さ。の。親。父。を。殺。害。し。て。金。を。奪。取。し。盜。人
 たり。さ。こ。そ。念。う。れ。べ。れ。と。國。司。の。指。揮。を。行。て。下。さ。る。の。法。お。可。行。奴。さ
 是。の。事。も。さ。難。し。と。や。は。り。し。も。目。見。へ。り。と。引。作。向。と。さ。る。所。寄。り。て

化とされハ跡の月園系山あて既ハ怪獸ヲ喰れつぎ。り。を。強。盗。り。と
 救ひ。これ。と。大。恩。の。人。な。り。され。ば。お。思。ひ。ど。なる。事。う。ね。と。擧。げ。つ。又。その。名
 を。別。姓。と。し。て。鈴。い。ふ。と。寂。莫。村。の。孝。子。なり。と。父。の。地。帯。は。け。は。親
 小。孝。の。人。い。を。かく。妻。媿。の。業。と。せ。ん。と。か。え。り。疑。ひ。つ。角。小。公。は。ね。事。よ
 と。思。ひ。廻。り。し。日。外。海。野。原。の。浮。籠。を。此。目。代。と。欠。六。額。を。よ。せ。く。何
 り。語。り。し。耐。別。姓。といふ。名。の。き。耳。入。り。今。思。ひ。合。れ。ハ。一。条
 此。男。の。事。も。さ。有。け。り。あ。ま。う。お。公。は。不。良。者。と。な。れ。り。お。公。は。行。成
 り。を。つ。く。り。し。お。公。は。造。成。流。れ。を。入。り。の。定。め。後。は。じ。く。誓。敵
 とも恨。難。し。お。思。ひ。連。て。控。豫。ら。し。別。姓。ハ。弓。太。郎。と。い。ふ。も。此。人。と
 一。端。我。を。敵。と。恨。と。思。ひ。も。終。小。公。實。の。は。不。知。り。却。て。我。を。救。ひ。し。も
 へ。り。人。と。頼。母。益。を。と。れ。り。お。公。は。お。公。と。を。れ。を。獲。り。お。公。は。引。戻。され。し。仰。り。て

歩行つては困らる。かゝる酒を飲めり。いざ終へつて春てこの熱
 ひよるべしといへばよれ事とて皆そこに入ぐ。お食酒の果は帯細解
 て涼とて。大くさる味もどするほども夏の日もいつく夕影となりぬ。
 亭ろと驚くされ。ふぶふんとてよるはひ知る折しも鏡細鏡を云
 お打つし幡天蓋はし上る中。小櫃を昇て夏衣を穿る傍に八丈の
 をよと連るす。その先よ六七寸ばかりあき。平面の頸はく。此
 法師の九条袈裟かけ。杖のさうて歩むる。垣料ちの行持の
 傍る。近づくほくに欠六をさし招れ。家お此変事ありつは。を
 て。我ち檀越とて中よりても。長者屋ハそのうと。跡の坊
 の後身して。我と睦まじく。いさなれば。珠文お人。を借と。髪刺しを
 せんを。然らば。はかりつる。こゝろ。涙されよといひつ。お子の僧

多遣ひされ。いほ。後興うら。明く。推し。移さんとす。欠六お。い
 厚志の。辱る。一度。伏を。送り。返り。大刀。自。一目。暇を
 とせ。明日。式を。とり。て。寺。の。送り。や。せ。い。老。僧。押。通。て。云
 ち。勘。は。浅。様。と。姿。を。老。母。と。せ。く。歎。を。流。せ。ん。中。く。お。は
 して。多く。の。人。お。ん。ね。ん。の。戸。の上。に。恥。辱。り。又。災。異。の。耐。も。あ。れ。明日
 とい。と。今。より。我。ち。の。茶。比。所。仇。野。山。の。送り。て。夜。半。の。煙。と。は。伏。を
 今。告。せ。彼。所。へ。招。と。子。息。と。も。に。如。形。執。り。つ。れ。曾。平。の。例。を。思
 へ。省略。する。が。結。句。の。大。刀。自。の。意。も。も。か。り。て。能。と。斗。ひ。され。て。足。下。と
 も。む。れ。る。ん。ご。る。な。り。徳。の。少。厚。考。の。葬。の。少。薄。と。外。傳。の。書。も
 へ。る。お。を。や。と。岩。も。珍。珍。と。い。井。吉。と。い。ひ。廻。せ。欠。六。と。い。は。れ。り
 と。や。て。伏。を。か。人。ま。せ。哉。紙。鳥。帽子。打。り。て。男。た。と。こ。も。願。ふ

乃 句 語 末 三



あけい金の猫引太
い華山郎
妖を怪
射と
所と



平
初
語
卷
三

十
六



平
初
語
卷
三

十
五

るとそれ際より早く權を取收流致し居るに早去られの後に走り
 出せぬ先法匠をじりめして俗共の迅とて恰風の如くされるべし
 脚は
 へゆて追慕するも此方とて失ひられど皆醉をれ怪しきも思ひあ
 ばしく脚疾と考へもあつといひつ。仇母山へと暮ひ行ね。さて
 館の用事終るや速とて家へ歸り。祖母刀目の前より欠六や疾し
 長者の教多の令と持おき一夜房をねとて腹を立とて居り
 其
 けく人もせし件あり尋連れ勤堂とや人の傀儡が件は居る
 今もゆるり尋ねばちや勝ら折て國を越せ其お又取障る
 の方とゆれ付て行はせぬより先深をれおけ斯はのるれと父の失
 終ひしを今も思ひせさる然るに年老るるれば公府をば
 病つとやあはれんさればとて思ひ果てしことありあはれどあ
 あり有の件

を語りしゆり案の外に驚くも氣もつくとおかり伏目をして打ら
 けり
 渠が山寺に在る比師の法師が此兒劔難の相ありといひ果し
 跡を遺れざりし然る但一定の宿業とや人のつぎあ非を我を謀りて
 多くの金銀を引出しはなれ施は遣ひ捨親の討つことあれ世は
 いふ物の好事なるが然る死ははりせされは益なれおよげれ
 も是より懲り後々に物故とことなせとあの中より我は長生
 存んぬ我家の至教を信じて失ひるんをかこも早う死なれ
 子なくたりと思ひ唯を負負の神返中よりひよりとこそお
 つやく涙もこぼさず海打ちみくことありあはれ氣多るれば
 あされあされと示をそと立ち父の仏間は燈明かけ魂床儲けら
 了り

とつとつ。面を覆ふる。監のごとく成りて。這く。逐耳。我が眼も。これ
 おや。太郎をも。見え。馬の。嘶。おびへ。故。助。人。と。し。い。ま。の。ま。よ
 ま。り。伏。せ。ぬ。此。情。を。と。く。う。太郎。又。こ。も。本。事。も。わ。り。と。驚。く。彼。亦。を
 呼。び。て。こ。の。松。岡。の。人。間。も。も。つ。は。我。に。續。じ。と。し。捨。て。小。弓。に。鞭。を
 打。つ。暗。をも。嫌。ふ。と。走。登。れ。ば。果。つ。と。答。あ。か。う。坐。小。弓。の。毛。を。と。り。お
 の。疾。走。も。あ。へ。て。い。ま。念。ひ。て。力。足。を。踏。て。こ。の。に。登。り。上。り。太郎。の。既。お。坂
 底。の。り。果。て。墓。所。と。見。え。し。下。に。至。れ。ば。此。墓。の。馬。類。の。鼻。を。吹。て。お。嗅
 せ。り。や。と。い。ふ。泣。く。て。は。方。に。何。の。目。も。も。つ。は。暗。く。て。た。違。る。河。音
 の。松。岡。の。あ。ら。ひ。て。ゆ。め。の。子。曲。河。の。さ。し。と。松。川。の。て。見。れ。し。と。見。お。り。ま。ふ
 と。る。に。後。見。て。お。打。振。る。火。光。も。わ。の。つ。る。が。折。く。木。立。岩。蔭。に。隠。れ。て。お
 を。底。や。と。い。ふ。細。く。て。お。り。か。れ。ば。山。彦。の。答。の。声。と。疎。ほ。し。と。れ。は。連。て。彼

知。小。あ。ら。れ。る。聲。を。て。死。人。の。肉。に。あ。が。れ。て。味。を。と。る。と。夏。小。味。氣。の。人。の
 自。を。と。り。是。は。い。つ。ぞ。や。我。食。ふ。き。者。と。い。ふ。男。人。は。隔。ら。れ。て。答。へ。し
 が。今。宵。も。我。と。ら。れ。ま。す。と。る。り。あ。ら。人。臭。や。と。言。な。る。よ。り。と。する
 を。何。の。物。の。匂。い。や。と。言。居。る。弓。太。郎。が。公。の。中。に。お。り。し。も。い。は。ん。思。ひ
 今。ハ。迹。も。逃。は。し。と。思。ひ。し。れ。ば。あ。ら。人。付。て。と。も。か。も。さ。ん。と。神。佛。の。念
 だ。て。付。や。と。辛。じて。退。付。て。爰。お。し。つ。つ。と。て。上。り。松。岡。の。光。は。ま。し
 声。や。方。と。い。ふ。れ。ば。僧。の。何。の。ま。ま。に。ま。ま。の。物。の。十。人。斗。お。あ。ら。う。て。現。珀
 を。磨。入。る。中。の。眼。を。と。り。紅。井。の。香。を。嗅。ぎ。て。指。の。中。の。針。を
 と。り。と。見。し。人。の。肉。を。お。ひ。ち。が。ひ。て。破。喰。ひ。居。る。従。者。の。一。目。見。る。より
 ある。や。と。叫。び。て。う。伏。し。倒。る。は。ら。持。る。松。明。を。投。捨。し。菘。の。料。と。と。そ
 う。傍。に。積。ま。る。柴。薪。の。中。に。投。げ。か。山。風。は。吹。死。ま。て。忽。白。盆。の。ご。と。う

つらぬらう太郎も忍しとれど。しや父の百さかめりあつた強てなれい
 こゝろ引散したるゆへ果して父の衣もくされ髪も逆立ちり怒て悪斗
 ぶしつりいも失果く。警へ鬼をめりあもあまも等一止も逃さるるかと
 箭打つて銃を合され馬の勇まよいとみて躍りて此勢ひは妖物なる
 術すやぬらん。や近ちる亦を右往左往まよ廻しては。詰引詰み庭に村
 殺さ中勝りて猛く飛かけりかあり。初より弓太郎を目かけて頭を飛
 かくすれど。や馬奇代の後足るれば。發射飛去りてその迹所あ
 こゝもさる涼より太郎此をくれば。中らの頭と見えしれ亦をよく認ひて
 矢二助も射けりぬげ。射しを殺してとらうと吼る。村山谷一度お
 ぞめれ涙るるが。終りのけし倒る所を。はらりと馬より飛下りま太郎引
 抜て起し。まど一刀さす。されし劍の如き。爪をまき。弓太郎が額髪

をを掻裂れと。射ゆるさるさ。射しに殺され。園山もくえ失ふ
 なる猫も。あて。爰しこふ九丈まを射伏するも。とて鳥の如き。猫の
 年打るるま。有れが。あま。今宵此馬ま。あま。さらほ。我の心
 定この物も。に喰られね。返るも此馬の父の場なり。りのと思ふ。あも
 又涙と。さる。あの海猿と有。はを。な。人。知。世。と。亡骸の上。柴
 打。覆。ひ。て。火。を。け。奴。徒。者。が。面。水。を。ね。ま。じ。て。海。は。活。棒。小。巻。り。し
 欠六以下を。尋。さ。る。に。や。近。泳。り。て。在。ざ。り。公。利。と。世。廻。り。て。里。人。か
 告。げ。せ。る。ま。に。錦。織。を。引。提。松。明。も。輝。つ。れ。登。り。あ。り。此。勢。ひ。は
 妖。物。なる。と。限。み。柴。より。物。も。運。び。て。主。徒。者。と。食。さ。る。は。く。も
 語。る。此。四。十。年。あ。り。爰。ま。此。猫。股。を。と。て。こ。も。な。く。ま。く。の。化。猫
 どの。隨。ひ。あ。山。古。の。三。衣。葬。具。を。と。り。あ。り。て。葬。の。ま。爪。を。ま。り。里。人。を

とあつりし亡者びえらひさいせしこと折し有しがおれとてもさす
あ。今日あつりし其敵を取しと編み君のゆきなりとほひ合たり。さう
は埴科の晨撞もきこえられへり太郎の生滅滅己と唱へつ。反撞
て父の透骨を取集め。態と徒歩より立ゆれ。公利を引里へるの後
あ。添ひ称名誦経よりぐ。伏をばし。てぞ送りくる。後、此山を猫山と呼
猫岩猫の瀬さういふ名も今ふたつ。残りたれとらん。

岐蘇踏の丸木橋

叔又夕霜を其日剛他軍字のあく。合じと主隠る。里人太路。台亦
て人目敏る。うたれ。善太がり。へ往ん。中く。怪し。はまんと。再び我
立廻り。あつてこそあ。と入て。うたれ。焼と正体。く。泣倒。卯吉も。欠。六。又。實。倒
され。射。闘。あ。て。胸。を。打。息。は。て。起。も。上。ぶ。喘。と。居。り。た。れ。は。是。を。め。

彼をも扶起して湯の手をさる。じて焼く同中。その足は何成者の狼藉。く
多家内踏あし。室戸を人打毀れ。れぞ。盗入る。あ。の。入。り。く。や。剛。他。屋。屋
合せざりし。と。虚。知。が。教。よ。と。人。の。焼。不。然。ま。へ。あ。ぶ。と。有。つ。る。こ。と。を。泣。く。語
了。我。自。身。の。館。よ。ま。あり。て。剛。他。が。牙。あ。犯。し。を。披。と。先。か。う。け。焼
あ。つ。せ。ん。と。あ。つ。て。い。か。折。折。て。脚。も。と。ね。は。方。は。棄。て。方。へ。彼。の。鏡
あ。年。又。あ。は。し。ら。る。者。な。れ。奥。ま。ぬ。へ。あり。て。我。云。つ。る。怪。を。愁。ひ。す。く。
別。他。を。伴。ひ。ゆ。り。られ。よ。し。は。あ。お。ち。因。玉。の。内。よ。一。夜。も。ま。ま。と。あ。い。さ。き
う。と。掻。口。説。て。頼。り。が。夕。霜。も。る。理。と。ら。ず。軍。字。は。連。ん。ぬ。画。の。重。所
あ。く。は。し。て。暗。雨。あ。つ。り。て。所。鼓。へ。出。ん。後。巡。り。く。そ。之。た。れ。は。俄。ふ。ち。胸。に
病。て。う。め。れ。伏。を。焼。も。打。吉。も。滅。と。思。ひ。て。押。抱。へ。其。方。は。弱。く。て。去
焼。の。何。と。あ。つ。ん。去。も。奥。板。は。は。を。愁。ひ。す。え。ん。よ。も。敢。し。後。の。車

あはれと公強く思ひ速しと行じと控傳せし霜も苦氣も我も疾も
 らまゆしとれど紗でもあひ疑しみる公地帯もあつて明日こそあつ
 りといふ方ありて生夜のみと夜別借が上段に積たて目も合せ
 不圓柱の木の葉のやめんと公はけん後よ折枝買を長老も夫
 故こそさる難うも透れれりとも思ひ合はれて空忍くありて
 姨捨山の方を伏拜を我子の代りも現か合はれぬ故に
 とん中に大願を立て枕も思ふを現はた夕霜を思ふに
 に卯吉も父の音信もゆして懐きまよふ文書も今まいたい
 逃んやうもあつて涙もあつて籠まわりて紗と云上れへ奥も
 去く度夜の内へ入る人へさへいふれ其子も榊木を握ま
 並へて犯す責問之と捕へられ夕霜の足をとるより公の鬼も

責られて、食ひを卯吉も今や父の呵責もと悲しれ物も疾
 さふあり父の出おせよしと層雨の羊次房びらして行居るも
 なる有り軍宗塚端も揺も夕霜を呼作向く荒時の女の教
 去に腕付て居るが斯いとれて伏目も成て徒教するを公の流
 や娘も人を和らげていふやや女も昨日剛借が冬もまけ
 渠も妻も定かに霜もあはれ妹も老惚てさるる釘吉と中
 下は切と取られはたお答はは疾ぬれ別借におもて如何に
 教も時日より我をわけて責問もあつて落ねへ今又引
 りん長居と傍杖喰ふると吐りのふれ夕霜の鬼のららひ
 去てつあぐ卯吉も引き度の外へ走出てもはる剛借も
 に引合も思ふから其体をとれ頭の如く一を肉祖せく腰

押巻さるるれ赤らうと猛入るり終り上て宙おしきあるも釘さるる位
 してきて取らるる割借されとるるり流る 涙腮を傳ひ咽の縄目
 浸してゆく食入申うられ頼る物も云はれ縄をたも長りて退退んも
 せられ別借ハそこお立止り涙を吞返しあまら。卯吉申同申う母ハ何
 ぶおのる夜さう今朝の間もおおれハよくあうるるう公細くおのる人ハ
 ひと唯一人あやして打連くハあつらも昨日ら太郎といハ少年の事あるし
 けんが其つめ告んとやあつらといハ夕霜又胸を踊らして何故ハ彼ハ
 のみを尋すの同らんと不審は然し一帯で傍らういハあうの人のあも今
 日も我ら人のあうる夢よんるるもわれをのめまああう同修さ
 剛借ういづらう天女仰きて大息をつれ今ハあうとつづあつら夕霜
 ひと此ら太郎といハ人こそ我々其の罪を深し赦ひくれされんとあうて

夢く頼る屋今と昔ははととりの我我を教と疑ひ恨とあうるあ
 さふ又か誰ありて我を救出せんあう我囚玉の内よあうなりねも。は
 許しう母人を孝養しう伴を憐とられ。卯吉も夕霜を母とあうれと
 小祖母と幼傳と我死らるとあうも勢母人ハ知らまてあれ昨日より故夜の
 肉裂骨碎されハごても活へとあうねハ今連るも限りあうれ教うて
 よとて外士が押あては居る袖を及びうらうて嚙へて引放し。ともは涙は
 うる教を授けははわら。然る後小縄取ら。卯刺移ると引支り父の後
 を送られハう様は打れらとええを脊中ハ紅井の練きねを水にぬして
 せらるあうら。さうとあうて有るるあうら小知士目もふれては所はは例に
 を相とぬぐもあじすして。鼓の外へ伴ハ出るさう知吉ハ口堅めてあう
 久の境ハことよく言はれハ歎の中やも打悦びく。遠らね間ハ教りて



ぬるるん物ごと日とわきて行居る。又夕相の音太はすはぬれて停連くた
 衣はし揃るゝの欲りたれば。もろく後ことろもろく長者と謀りしり記く。
 必ひくろぞ別他が縁係とあり。姥は支那まぬけぬることいふ方々ん苦
 しく。ろの善きかゝの怖後行をも知りて可愛の情も醒されば長者は
 殺しん別他はあふび音太もやといひ出まゆれど。安定ももえぬことを
 中くお云散て音太を捕へせ。一条我はより洩しと知りてその仇は我と同敷
 のやうにいひるさうらんや。其附何と隠せぬ我は此目代は人憎まれ居れど。
 敵の身をも斬母げはと危くて。さほぐも廻るは兎角ははけそ我公の
 めんじさうり。ある悪者ももろくは初し悔はさの今取返しめく懲を
 懲り。此後男といふお明る目してそもやどとせよひり。此度のゆ姥
 や好吉ともは我もも外ははとせしより。少く牙の白くやうおえんく日次行る

はふふ又懲をまふお弓太郎がふゆ思ひおし牙はそぐやうおえんく床し
 くれは此比剛他がひひしこと成よれ候よとおまひよりて夫よかほけく伏せ
 行と。そのくはあつちあつちも見えやと思ひて。姥はあふのこつて別他
 の傳言いひよ終とせんと。世間憚らば變化庄に衣着てかこよひきて
 弓太郎は間途くておせへんといひ入たれど弓太郎はこの後仇野山少く
 横股小橋破れられ疵の其折さすもももえんくざりか次第小痛
 知し面と落踏の弄のやうお忍しく腫あがり。身うち焼ごとく苦
 ておももえんくを悩む伏居る付られは声おまきうは霜の本意遠ひ
 く後らにゆりよまうり。か弓太郎病けりぞ。さくもも白姥お連て
 のさほを同わさうら別他を救ひ出して不佞の死をさせさの男友として
 もかくても難脱宿報ふこそと哀なれ足る扱金かの音太の別他家

多と失ひて今や漢立ると肝こころも身も添ぬ体なれば痛はくそ
 程豫をりしう。元来かこれ者なれば。ことと心よりて只尋常乃消
 息久のやうに讀なりてせせられハ善太がゆらけゆも幼者のよも
 虚瀆よ一と云おりのねハ。さもかを坐て早まりてあしう打擲るりと
 壓口して居るが。いば。紛米の賃りて事さ。とせんとつらまはま
 はと立とゆりければ。夕霜飾りの嬉しさにその怪弁吉次引きて扱も
 か。うらうらさせれ者多と脊中ハ。控控と云ら。

信濃の木の葉落ふから丸木は。さし射のあまうしと
 とは。とさみたれハ卵止る。糸を巻収めり。

ちあひのなるものほ。ももやど。ねど。お母。と。あま。むら。り。ぞ
 と。こ。へ。て。さ。し。出。と。や。夕。霜。ハ。手。取。け。も。流。る。恥。し。く。て。下。面。の。方

へ。ち。う。り。入。ぬ。此。女。折。小。觸。さ。の。か。れ。優。き。一。郎。を。も。よ。と。出。み。じ。て。一。向
 の。更。ぬ。も。あ。ま。縁。と。牛。得。の。仇。じ。さ。ふ。ふ。良。者。を。以。詳。され。自。然。小
 ぬ。も。ゆ。け。は。く。さ。り。後。身。を。も。あ。ら。し。て。怪。し。死。び。さ。ん。と。げ。ぬ。後
 そ。の。み。と。ち。ま。ん。が。女。も。ぐ。女。と。して。怪。む。さ。ハ。此。多。情。ゆ。れ。行。ひ。す
 こそ有る。

